

■ 維持管理の魅力とは？



井上 晋*

近年、仕事柄からか変状を生じたコンクリート構造物の診断や事後の対策について相談を受ける機会が多くなってきた。変状の原因は、塩害、中性化、ASRなどの劣化から、収縮、初期欠陥、疲労、構造的変状と多種多様である。これらの変状のうち、構造物の供用にあたって緊急な対策を要するものはそれほど多くないものの、そのまま放置すれば、10～20年後には供用性を脅かすものになる可能性を秘めているものも少なくない。一方で、社会基盤整備に投入される予算は近年減少の一途をたどり、少ない予算で対策を考えるためには優先順位を付けざるを得ない。効率的な維持管理を行うためのアセットマネジメント、ライフサイクルアセスメントが近年重要視されてきている所以である。国の長寿命化修繕計画策定事業費補助制度に合わせて各地方自治体もようやく計画的な維持管理を意識するようになり、制度的にはようやく一歩を踏み出したといえるであろう。しかしながら一方で、各地方自治体における維持管理技術者の養成という点に目を向ければ、その状況は必ずしもよいとはいえないのではないだろうか。

数年前に研究委員会の活動で、関西のある地方都市と合同で橋梁の維持管理に関する勉強会を数回開催した経験がある。そこでは、10名程度の技術者に参加いただき、橋梁台帳の整備や管理橋梁の点検の実施、点検結果や橋梁データに基づく維持管理の優劣順位の決定など、有意義な結果を得ることができ、長寿命化修繕計画の策定に役立てていただけたものと自負しているが、技術者に対するヒアリングで、維持管理の重要性に対する意識は強い一方で、日常業務に忙殺され、点検に立ち会ったことのある方がきわめて少ないということに驚いた記憶がある。この都市は関西でも規模が大きい方であるので、より規模の小さい市町村での状況を想像することは容易であろう。

このような背景もあってか、都道府県や政令指定都市レベルでは、学識経験者の協力を得て、維持管理計画の策定はもとより、研修会や点検実習の実施などによって職員への知識の普及と技術力の向上を図ろうとする取り組みがなされつつある。このような研修会などには単独での開催が困難な市町村レベルの技術者も参加できるよう配慮がなされていることが多く、その

意味で都道府県が担う役割は大きい。筆者も研修会などのお手伝いをさせていただくことがあるが、参加者の中には構造物の維持管理に対して意識が高く、所属部署でリーダー的な存在の方が多数おられるはずである。手続きや予算の観点から、軌道に乗せるにはかなりの困難が伴うであろうが、制度の確立に向けて今後も継続的な努力をお願いしたい。

さて、21世紀は維持管理の時代であるといわれている。大学の講義でもその重要性が述べられ、研究も維持管理に関連するテーマが増加している。その甲斐あってか(?)、管理者側の立場で維持管理に関わる仕事がしたいという学生は少なくない。しかしながら、維持管理という言葉はどうしても地味であり、後向きの印象を与えてしまう。せっかく高い意識をもって官庁・地方自治体に就職しても、日常業務に忙殺されればモチベーションは下がるであろう。たとえば、本工学会が実施しているコンクリート構造診断士試験のここ2年間の受験申込者の業種別内訳を見てみると、PC専業者26.2%、建設会社26.7%、コンサルタント25.5%に対し、官庁・地方自治体合わせて3.4%という数字である。前3者が大半を占めるのは当然であろうが、気になるのは官庁・地方自治体からの受験者がきわめて少ないという点である。もちろん、官庁・地方自治体の方はその資格の下で仕事をするわけではなく、必要なしといわれればそれまでであるが、維持管理計画の策定や研修会でのリーダー役としてその知識を役立てていただきたいと思っている。そのためにも維持管理という仕事が魅力あるものでなければならない。

では、維持管理の魅力とは何であろうか。この問いにはさまざまな答えが返ってくるであろう。私自身も明確な答えを持ち合わせていない。ただ、一ついえることは、本号でも紹介されているように、われわれは過去において技術的にも景観的にも優れたコンクリート構造物を多数建設してきた。これらの素晴らしい構造物を後世に残し、伝えることは立派な維持管理の仕事である。そこに魅力を感じることができると技術者の卵を養成することが大学人の使命ではないかと感じている。

* Susumu INOUE : 大阪工業大学 工学部 都市デザイン工学科 教授
本工学会理事